

いとしい時間

山谷えり子



桜が咲くと、三児とお弁当を持って花見に出かけた頃がなつかしい。小さな俵型のおむすびや大きな三角むすびなどを、新たな春の生命が家族に注がれるやう願ひをこめてむすんだものだった。

「むす」とは産すこと。「ひ」とは「日や霊」。霊的な力がなければ、何事も生まれないうことを教へてくれたのは祖母だった。だから、おむすびをむすぶ時も、いただく時も「ありがたい」「もったいない」と思ひながらむすびの力をいただくのよといふ教へは、私の体の奥に記憶として刻印され、おむすびを握ったり、いただく時は、無上の幸福のひとつともなる。

「女性の活躍」「女性が輝く日本」といふ言葉が、連日マスコミに登場する昨今だが、もっぱら経済活動や、職業人としての成功をさすやうにとらへる人も多くて、淋しい気持ちになる。少女時代、私は新聞記者をしてゐた父から「将来何になりたいの？」と時々聞かれたものだった。新聞記者と答へたり、水泳の先生と答へたり、お母さんと答へたり、いろいろだったが、私にとって、働くイメージは、人に喜んでもらふことであり、むすびの表現であることであった。家族との会話の中で、また商家や農家の友人宅で、働く大人の背中を見ながら、さうしたイメージを

広げることができたことは幸せであったと感謝する。

三児を育てながら、新聞記者、生活情報誌の編集長として働いてきたが、ふり返って一番の仕事は何だったかと聞かれれば、十九年間、朝五時起きで子供らのお弁当を作り続けたことであつたと躊躇なく答へたい。さ中にあつた時は、難儀と感ずる朝もなくはなかつたけれど、遠目でかへり見れば、何といとしい時間であつたことだらう。

先日、栄養士の皆さんとお会いすると、「教育は知育、徳育、体育と一般には言はれますが、食育も入れて下さい。食卓の中で人の心と生命は育ちます。和食がユネスコの無形文化遺産になりましたが、和食の和とは人と人と自然のつながりの中でむすばれる力のことなんです」と言はれ、保存料がたくさん入つた弁当を「いただきます」の心を忘れて食する人が増えてゐることを憂へてをられた。

この四月より、小学一年生から中学三年生までの道徳の教材(文部科学省発行)が新しくなる。そこには和食や一期一会の心、自然の恵み、先祖や大いなるものの存在などが記され、小学五・六年生用には「人生最大の幸福は一家の和樂である」(野口英世)、「樂しみは 妻子むつまじく うちつどひ 頭ならべて 物をくふ時」(橘曙覧)、「銀も 金も 玉も 何せむに まされる宝 子にしかめやも」(山上憶良)などの和歌も記されてゐる。

桜の花の下、おだやかで希望に満ちた心で結ばれてきた先祖と共に入学、進級する子らを寿ぎたい。

(参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長)

杜
に
想
ふ